

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第685号 平成26年2月7日

## 道徳の教科化

昨年暮れの12月26日、文部科学省の「道徳教育の充実に関する懇談会」は、現在正式の教科となっていない「道徳の時間」について、これを「特別の教科」として位置付ける報告書を纏め、下村文部科学大臣に提出しました。

文部科学省では、今回の報告を受け、中央教育審議会の議論を経て2015年度の教科化を目指す考えの様です。

報告書では、道徳を「特別の教科」化すると共に、

- ・国の検定を受けた教科書の導入
- ・数値による成績は付けないものの、一定の評価を行う

事等を提案しています。

更に報告書では、学校における指導体制の強化に関して、道徳教育を各担任任せにせず、道徳教育推進教師を中心とした指導体制が構築されるよう、校長のリーダーシップを求めると共に、地域における道徳教育の中核的な推進役となる「道徳教育推進リーダー教師（仮称）」の加配措置についても言及しています。

報告書では、「我が国社会には『道徳』に対する一種のアレルギーともいような不信感や先入観が存在」していると指摘していますが、今回の報告書に対しても、批判的な論調は少なくありません。

その多くは、

- ・現行の仕組みの中でも、道徳教育の充実は図られており、教科化は必要ない
- ・検定教科書を使用する事は、特定の価値観の押し付けになる
- ・心の内面に係わる事を評価する事は難しいというものだと思います。

しかし、こうした反対の声というのは、とどのつまり「道徳教育は今のままで良いではないか」といっているのと同じ事です。

道徳教育の必要性や目標は各校種の学習指導要領総則において明記されていますので、全ての学校では、学習指導要領の目標を達成するために必要な具体的な教育活動を展開していかなければなりません。しかし現状においては、報告書でも指摘されている様に、

- ・歴史的経緯に影響され、いまだに道徳教育そのものを忌避しがちな風潮がある事

- 教員の指導力が十分でない事
- 他教科に比べ軽んじられ、道徳の時間が、実際には他の教科に振り替えられている事もある事

等から、道徳教育が機能していない学校もある等、期待される姿とは程遠いのが現状です。

「道徳」というのは、人が他者と協働して社会を形成し、また、その社会の一員として生きて行く上で共通に求められるルールやマナー、規範意識というべきもので、人としてより良く生きる上で根幹をなすものだといえます。

この様な「道徳心」は、放っておいても自然に身に付くものなののでしょうか。勿論私は、そんな事は有り得ないと考えています。

子ども達の「道徳心」を養う上で家庭が果たす役割には大きなものがありますが、それと同時に、各学校が学校教育活動の全体を通じ、子ども達の発達段階に応じて「道徳心」がしっかりと身に付くよう教え導く事は、極めて重要です。

また、道徳教育が教育活動全体を通じて行われる為には、学校全体で、道徳教育の目標や内容、指導方法、教材等について共通認識を持って取り組む必要がありますが、「特別の教科」化によって道徳は、より学校教育活動全体の中核としての役割を果たす事が可能になると思います。

特定の価値観を押し付ける事に繋がるから道徳教育に反対という主張をしばしば耳にしますが、私には、そう主張する人自身が結局、自分の価値観を周りに押し付けようとしていると感じられて、違和感を覚えます。

もとより、道徳教育は子ども達に特定の価値観を押し付けようとするものではありません。まして物いわぬ国民を作ろうとするものでもありません。

人として生きて行く上で何が大切かを自分の心で考え、そして行動出来る、そうした力ある子ども達を育てる事こそ将来の日本にとって極めて重要で、価値ある事です。その点でも道徳教育には、重要な役割が有る筈です。

今後、「心のノート」の全面改正、道徳の教科書の作成、教員研修の充実等課題は山積していますが、国においては、未来を担う子ども達にとって人生を生きる上での糧となる、新しい道徳教育がスタート出来るよう、十分に検討して欲しいと思います。(塾頭：吉田 洋一)